
破壊者

ZODIAC

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊者

【Nコード】

N3902V

【作者名】

ZODIAC

【あらすじ】

いつもの日常を何気なく過ごしていた当たり前な時間さえも一つの出来事で一人の少年の運命を変えて非日常へと巻き込んでいくそんな非日常の生活の中で少年は何を思い何を見るのだろうか選ばれた者たちは世界を破壊する破壊者となるのかそれとも世界を救世する救世主となるのだろうか

注意、作者は多忙のため更新は不定期になる恐れがありますのでご了承ください

また戦闘が多くなり、説明不足のまま進んでしまいかもしれないです
誤字、脱字等々などの指摘や感想などもよろしくお願いします

episode 1 選ばれし者

ただいま青春真っ只中

俺は桐谷亘

「キリヤワタル」

極一般的に日本で生まれ

日本で育ち

普通に高校にも進学して

スクールライフをおくっている

実家が剣道場を営んでおり

幼少期から剣道を教えこまれていて

今も練習は欠かさない

部活は入っていない

いわゆる帰宅部だな

前置きはこのへんにして

俺の高校生活を覗いてみよう

学校生活も一般的で

授業を受けて

昼休みをのんびり過ごしたり

そんな感じだ

「何悟った顔してるんだよ」

こいつは俺の昔からの連れ

名前は相澤大地

「アイザワダイチ」

腐れ縁みたいだ

「別に何も悟ってねーよ」

こんな感じで他愛もなく過ごしている

「授業終わったし帰ろうぜ」

俺は軽く返事をして

下駄箱へ向かった

「今日はラブレター入ってないかな……………」

やっぱり入ってない」

まあ毎日見る光景だ

「早く行くぞ」

大地は慌てて靴を履いて追いかけた

この帰り道に事件は起こる

運命をも変える出来事が

「んでさあこのゲーム超オススメなんだよ」

大地は大のゲーム好きだ

「俺は興味ねーよ

それよりも修行しねーとな」

「修行修行ってよくやるね」

「いやゲームもよくやるよ
そんなに」

俺はふと視線を前に戻した

すると目を疑う物を見てしまった

「あれは島？」

「えっ！？どこだよ」

「あそこだ、あそこ」

どうやら大地には見えていないらしい

すると空に浮かぶ島から赤い何かが一斉に飛び散り

そのうちの一つが急速に接近してきた

「！？」

反応した時には俺は体ごと吹っ飛ばされた

壁にあたり凄い音を奏でた

「巨!!」

「一体何が起こったんだよ」

体中が痛くて右目が凄く熱く感じる

「お前目が赤くなってるぞ!!」

目に手をやると出血しているのか血が付いた

どうやらさっきの物体は目に直撃したみたいだ

民家の人が救急車を呼んでくれたみたいだ

俺はそこで気を失った

次に目が覚めて目に入ってきたのは

見知らぬ天井

いや病院であろつ天井が目に入った

少し頭が痛い

「そつだ目は!？」

手で触れると包帯が何重にも巻かれていて確認がとれない

そんなことを考えていると黒いスーツをきた男が入ってきた

「気分はどうかね？」

「最悪だね」

「そうか

だがすぐ楽になるだろう

君は自分の目を確認したかね？」

「ただだけど」

「鏡の前で包帯を取って確認するといい」

俺は鏡の前にたち包帯をほどいていった

ほどき終わり目を開けた

「赤くなってる!？」

「よく目を見ると紋章が眼球に刻まれているだろ」

確認してみると確かに紋章が刻まれていた

「おめでとう」

君は1000人のうちの一人に選ばれたんだ

バスター
破壊者として」

「バスターだと？」

「君にはあの島が見えるだろ

もつとも私は機械を通してでないと見えないがな

あそこに陣を張っている

クリエイト
創造者が君を選んだんだがね

君にはクリエイトたちとの戦争に参加してもらっ

拒否権は無い

拒否すればここで抹殺せよとの命令を受けている」

「ようするにそのクリエイトとの戦争に勝てば生き残れるんだろ？」

「そうだ」

「拒否できないんなら参加してやる」

「では時間がない

すぐに島に移動してもらっ」

黒いスーツの男が話終わると同時にヘリコプターが窓に寄っていた

「さあ飛びうつれ」

ヘリコプターの乗組員が手をさしのばしている

俺は頷き飛び乗った

数分たって島の離陸場にヘリコプターを降ろして

島へと一歩踏み出した

ヘリコプターの中では説明があり

バスターはクリエイイトに唯一対抗できる存在で

少しの魔力なら扱えて

身体能力が向上しているようだ

島に降りて少し歩くと人が密集していた

俺は密集している中へと入っていき建物の中に入った

椅子が並べられており

自由に座れるみたいなので

適当に座ることにした

しばらくして前に教官みたいな人が仁王立ちして話を始めた

「早速だが君たちにはクリエイトと戦争をしてもらう

もちろん戦いかたはわからないであろうから

君たちの脳に直接情報を送る」

教官みたいな人は後ろの 科学者に合図を出し

科学者は機械の電源を入れた

しばらくして頭が割れそうな感覚に陥った

「俺の………戦闘………スタイルは………戦闘………
…方法」

数十分続き機械が止まった

みな同じように荒く息をしていた

「ではこちらに武器がある

好きなように取ってもらいたい」

俺たちは無言で武器をとりにつた

俺は武器として二丁銃選んだ

どうやら二丁の剣は必須装備のようだ

銃なんて使い方なんかわからなかったが

今は毎日使っていたかのように思える

戦闘用の服が支給されたので着替えた

赤がベースの色で黒のラインが入っている

非常に動きやすい

準備ができ外に並んだ

「クリエイトは50人だ

頑張るように」

「50人かよ

生き残れるじゃねーか」

一人金髪の男が笑いながら発した

「クリエイトは青色の服を着ている

残り5分で戦闘開始だ」

いきなり非現実的な展開で戦えと言われているのに何の迷いもない

バスターは基本剣に自分の魔力を纏わして戦う

バリアーも少し張れるみたいだ

銃は魔法銃となっているが

この魔法銃は魔力の消費が少ないので使いやすい

島全体は広くないので挟み撃ちには気をつけないと

「てば始まるぞ

5・4・3・2・1
.....

スタート!!」

そう戦争が始まった

next episode

e p i s o d e 2 絶望と悲しみと（前書き）

戦闘の始まりです

episode 2 絶望と悲しみと

俺はとりあえずみんなについていき様子を見ることにした

しばらく走ると

青い服をきた男が歩いてきた

こっちは30人はいる

普通に考えると無謀だ

「俺がすぐに終わらしてやるよ」

金髪が剣を構えて斬りかかった

青い服の男は剣に合わして左手の指を持っていき

剣先を掴んだ

「なっ!？」

「クリエイト相手に一人とは早死にしたいみたいだね」

クリエイトは剣を折ると右手に拳を作り

魔力を拳に瞬時に集めて金髪の腹へと叩き込んだ

金髪は腹に穴が空き絶命した

俺たちは啞然とした

一人の人間が瞬時に殺された

「くそおおおお」

三人剣を構えて斬りかかるが

三人は何者かに蹴り飛ばされた

「あなた一人でするんですよ」

もう一人クリエイトが現れた

圧倒的過ぎる

俺は何もしていないのに半ば諦めかけてきた

「紋章の力を使う」

他の人が特集能力の紋章を使うなか

俺は使えない

俺は異例らしく覚醒する条件が不明なのだ

紋章の力によりパワーが上がった者から次々に斬りかかっていったが

誰一人と傷をつけられない

「バスターだめじゃないか

選んだ意味ないよ」

クリエイトがこっちに走ってきた

俺は銃構えて発砲した

みえないバリアーがクリエイトから銃弾を遮っているようだ

横にいたやつも銃で一斉に発砲している

「甘いですね」

クリエイトは魔力で刃を作り一掃した

バスターは次々に斬られて

血が飛び散っている

俺にも帰り血が飛んできている

俺は冷静に銃に魔力を込めて

クリエイトが高笑いをして隙を見せている間に0距離で銃を発砲した

爆発が起こり煙があたりを包んだ

俺は咳き込みながらも煙から脱出して距離を取った

「よくも……………」

よくも……………」

よくも私の肌に火傷を負わしたなあ……！」

クリエイトは怒り叫び

俺に向かって走ってきた

銃から剣に持ちかえ構えた時には目の前に来ていた

「死ね」

魔力の剣で斬ってきたので

俺は慌てて剣に魔力を纏わして防いだが

すぐに剣にヒビが入ったの確認したので剣を離して距離を取った

しかしクリエイトはすでに移動しており

俺は魔力のバリアーを張るが蹴りで割られて

そのまま腹に蹴りを入れられた

力強く蹴り飛ばされて

島の外まで飛ばされて落下した

俺は落ちていく中必死に思考錯誤した結果

バリアーをなるべく厚くし衝撃を和らげるため集中することにした

しばらくして山の祠に突っ込んだ

バリアーを張ったがかなりのダメージを負ってしまった

クリエイトは追いかけてきており祠に入ってきた

「楽に死ねると思うなよ」

クリエイトはかなり早いスピードでまた腹に蹴りをいれてきたので
反応が追いつかず瓦礫へと蹴り飛ばされた

あばらなどの骨のかなりの数が折られたようだ

瓦礫の中右手に何か物が当たっている

掘んで見ると黒い刀だった

試しに抜こうとしたが何故か抜けない

「終わりにしましょう」

クリエイトは魔力の剣を作り斬りかかってきた

俺は覚悟して黒い刀で受け止めようとした

その時頭の中をよぎった

「俺は生きる！！」

その瞬間に俺の右目は赤い光を放ち

クリエイトを衝撃でふっとばした

「何ですか一体！？」

俺の体が治っていく

これが覚醒なのか

俺は刀をもう一度抜こうとした

すると刀は抜けるようになり

刀を抜くと魔力が増幅した

赤いオーラが俺を纏っている

どうやらこの刀は俺の魔力に反応しているようだ

紅のような紅色がギザギザに入っている

これならいける

俺は確信して立ち上がり鞘を左に持って

刀を右手で構えた

クリエイトは怒りを覚え

魔力を集結した球体を放ってきた

俺は球体の正面にたち

刀を振った

剣先から衝撃波が出て球体は真つ二つに割れて消えて無くなった

「私はクリエイトだ

こんなバカなことはない」

かなり焦っているのか

魔力の剣を作って走ってきた

さっきと違い凄く遅く見える

俺は回り込んで鞘で腹を殴った

クリエイトは壁に吹っ飛び倒れた

「私はクリエイトだ

私はクリエイトだ……………」

「悪いな俺はバスター

そうお前らに選ばれた破壊者だ!!」

そう叫びクリエイトを切り裂いた

血が飛び散りクリエイトは粒子状になり消え去った

俺は刀の血を払い鞘に納めたと同時に魔力が収まった

「この世界で俺はどう生きていけばいいんだ」

俺は今までの何気ない日常を思いだし涙を浮かべた

そして俺の破壊者としての運命が始まった

n e x t e p i s o d e

e p i s o d e 3 任 務 (前 書 き)

作者オッドアイ好きです(笑)

episode 3 任務

あれから1年の月日が流れた

クリエイトは日本に降り立ち

日本人にその力を見せて憧れと希望を持たせた

この行為の目的は日本人の能力を飛躍させるためである

日本人にも力を求める者が多数おり

クリエイトの政策に参加し能力開発が行われた

能力開発は特別な処置を施し

クリエイトの力によって魔力を扱える体に適応させた

つい最近までは魔法などとは空想の話だったのに今は当たり前となっている

クリエイトは能力向上のためにモンスターも作り出した

困ったことをしてくれる

クリエイトの真の目的はまだわからないが

世界規模に発展するであろうことは予測される

戦争で生き残った破壊者は確認されておらず

仮に生き残っていてもクリエイトたちが追撃してきて殺害されている

俺の場合右目にカラーコンタクトをいれたら外見から破壊者だとわからないので命は狙われていない

以上の報告が空白となっていた1年間である

そして俺はヘリコプターに乗り空を飛んでいる

「亘、目標地点に到達したぞ」

パイロットのおっちゃんが伝えてくれた

俺はあの後レジスタンスに保護してもらい

今は任務まで請け負わしてもらっている

「ありがとうおっちゃん」

「任務終わったら迎えに行くから連絡頼むぞ」

「わかった」

俺は任務用のフードの着いたマントを着た

「今日もサクツと行きますか」

俺はヘリコプターから飛び降りた

空からの任務に参戦するのは何回もあったので慣れている

徐々に地面が近づいてくる

俺は足から着陸出来る体制に入り

足にバリアーを張った

「5
…4
…3
…2
…1
…

今だ」

足から着陸し両手を地面についた

回りに風がふぶいた

今日の任務はこの学校に侵入者が入る可能性があるという事で警備にあたる任務である

恐らくモンスターも出現するであろう

任務を再確認して俺は回りを確認した

どうやら中庭に着陸したみたいだ

俺は校舎のほうに向かって歩いた

歩いていると違和感を感じた

この違和感はモンスターの気配であろう

俺はフードを被って走りだし窓から教室を見た

今にもモンスターが一人の少女を襲おうとしている

「きゃ あああー!!」

少女の悲鳴が教室に響いた

俺は片方銃を取りだしモンスターに向けて発砲した

ガラスが割れる音が響きそしてモンスターは撃ち抜かれ消え去った

他にもモンスターがいるので窓ガラスを破って教室に入った

「残り4匹か

排除を開始する」

俺冷たく言いそして空いてる手で腰から剣を一本抜いた

剣を構えて近くのモンスターに斬りかかった

モンスターは真っ二つに裂けて消え

残りの3匹を横切りで切り裂いた

下級のモンスターだったのであっさりとすんだ

俺は血を払い剣をしまおうとしたら声が聞こえた

「注意がそれだな」

後ろを見ると侵入者が3人いて

一人は先ほどの少女の首に剣を突き立ており

残りの二人は魔法銃で残りの生徒を人質に取っている

「さあどうするよ

救世主さんよ」

俺は数々の任務をこなしており

たいていの任務が人助けで

通り名が救世主となっている

「早くしないと斬ってしまうぞ」

侵入者は少女の首に剣を当てており少し血が出ている

少女は怯えた目でこちらを見て助けを求めている

見た目から侵入者はどうやらクリエイトから処置を受けた者みたいで魔力を感じられる

クリエイトと比べると遥かに低いのでたいしたことではない

「武器を置く

少女と生徒を解放してくれ」

「いいだろ早くしろ」

俺は銃と剣をしまいベルトに着いた装備を取り外し手放した

剣が地面に着いたと同時に走りだして

剣を持った侵入者の前に立った

侵入者は早すぎて見えなかったのか反応出来ていなかった

「せっかくの力を大事に使え」

俺は侵入者に冷たく呟き

剣持っている手を叩き

剣を落とさした

次に後ろに回り込み首に手刀を加えて気絶させた

男の手から離れた少女を抱き止め寝かした

流石に魔法銃を持った侵入者は反応をしているが動揺しているのか

むやみに魔法銃を乱射してきた

被害がでる前に終わらせるため俺は走りだし

当たる部分にバリアーを張り防ぎながら

一人の侵入者の前に行き

鳩尾に拳を入れて気絶させて

もう一人も同じ要領で気絶さした

俺は携帯を取り出し電話をかけた

電話の相手は”あいよ”と電話に出た

「おっちゃん任務完了した

迎えを頼みます」

おっちゃんは了解と返し電話を切った

教室に警察が入ってきた

「お疲れ様です救世主さん」

俺は軽く頷き返した

ヘリコプターの音が聞こえてきた

俺は窓から外に出ようと思ったら

先ほどの少女が手を握ってきた

俺と同年ぐらいだろうか

「ありがとうございます

救世主さん」

少女は満面の笑顔で言った

俺はまた軽く頷き返した

行こうとするがまだ手を離さない

「救世主さん顔を見てくださいよ」

俺は正体を知られてはいけないので顔をそむけた

そして俺は手を半ば無理やり離し

窓から外に出て着陸されていたヘリコプターに乗り込んだ

「救世主さん目が赤色だった

凄く綺麗な……」

ヘリコプターの中で握られた手を見てた

握られたの久しぶりだったので少し緊張していた

今思えばあの学校は俺の通っていた学校が合併した学校ではなかっただろうか

一度その話を聞いたことがある

半分はクリエイトの処置を受けた者で

もう半分は処置を受けていない者で構成されている

そんなことをぶつぶつと考えているうちにレジスタンスの本部にたどり着いた

本部と言っても見た目は普通のビルであるため分かりにくい

俺はおっちゃんに礼を言っ

マスターに報告をしに行った

マスターの部屋の前に立ちノックをした

「どうぞ」

返事が返ってきたので

”失礼します”と言い部屋に入った

マスターは資料に目を通していた

「任務完了しました」

「亘か

ご苦労だったな

早速だが次の任務が決まった」

「内容は何ですか？」

「おまえ学校に行け」

俺は拍子抜けで口がぽかんと空いている

マスターは笑いながらも話を続けた

「確か前は普通に学校に通っていたんだよね

今回行く学校は前おまえが通っていた学校が合併した学校に行つて
もらつ」

「けど俺は死んだことになっているのでは？」

「親父さんが転校にしておいてくれたんだよ

だから手続きもやりやすいし

明日から行ってもらう」

俺は深くため息した

「そう疲れた顔するなよ

友達もいるんだろ」

ゲーマーの大地がな

「任務内容は学校に潜入して侵入者を排除することだ

あの学校はいろいろと狙われていると報告が入り

学校長からわざわざ依頼があり

年も出身もちようどあったのがおまえだったということだ

もちろんやってくれるよな」

俺は頷いた

「では編入を手続きをしましょう」

私は忙しくなるからな

制服は部屋に置いてあるから確認しなさいよ」

俺は”失礼しました”と言いマスターの部屋を後にした

部屋に戻り荷物を整理して寝る体制に入った

学校が懐かしいな

俺はそんなことを思い眠りについた

n e x t e p i s o d e

e p i s o d e 4 転入と出会い（前書き）

この小説がおもしろいのか心配です

episode 4 転入と出会い

俺は目覚ましで目が覚めて

学校指定の制服を着てネクタイを絞めて

食事を取り荷物を持って

しばらく帰ってこないであろう部屋に別れを告げて部屋を後にした

「とりあえずマスターに挨拶していくか」

俺はマスターの部屋まで行ってノックをして

返事が返ってきたので”失礼します”と言い入った

マスターは忙しそうに書類に目を通していた

「亘かななか似合ってるではないか」

マスターは嬉しそうに言った

「褒めても何もでませんよ」

俺は照れながら言った

「話は変わるが学校へはヘリコプターで近くまで送ってもらったことになったわ

向こうに着いたら学校長に挨拶してね

後は学校が段取りしてくれるから

間違っても破壊者の証の赤い目は簡単に見せたら駄目よ

本当に使わなければならぬ時だけにしなさい

クリエイト達に感ずかれるからね

心得なさい」

マスターは真剣な眼差しで話してきた

「約束は守るよ」

「じゃあ気をつけて行ってらっしゃい」

俺は一礼して部屋を後にした

俺はヘリコプターに向かった

ヘリコプターにはおっちゃんがいてヘリコプターの整備をしていた

「亘、いつでも行けるぞ」

おっちゃんはガッツポーズをしていた

「じゃあ頼むよ」

俺はヘリコプターに乗り込み手鏡で目を確認した

「違和感無し」と

赤い目はカラーコンタクトによって覆われ見えなくなっている

ヘリコプターは飛び立ち目的地に向かった

目的地にたどり着いた

流石に今日は飛び降りる訳にはいかないので

低空飛行してもらった

「おっちゃんありがとう」

「おう元気だな」

おっちゃんに別れを告げてヘリコプターから降りた

「学校はあつちか

なかなかでかいな」

俺は苦笑いしながら学校に向かった

ちなみに学校名は私立魔導中央高等学校である

俺の行っていた学校も合併しているが

俺は1年の時すぐに学校からいなくなったから

知り合いは大地しかいないのである

そんなことを思っていると門前にたどり着いた

「やっぱりでかいな

私立なだけはある」

俺は門番の人に書類を見せて

校長室までの案内の紙をもらった

案内の通り行くが広すぎて迷ってしまった

「あっちからきたから

こう行ったら

行き止まりか」

俺は方向音痴じゃ無いのに迷ってしまった

「どうかなされましたか？」

声を掛けられたので後ろを振り返ると

先日任務で助けた少女だった

「見慣れない顔の方ですが

道に迷いましたか？」

「不甲斐ないことに

校長室はどちらですか？」

「案内しますよ」

着いてきてください」

俺は少女の後に着いて行った

「他の生徒はどうしたのですか？」

俺は素朴な質問をした

「今ホームルームの時間で私はちょうど担任に頼まれて書類を取りに行つて」

帰る途中にうろつろしているあなたを見たから」

「恥ずかしい限りです」

「はい、着いたわよ」

「ありがとう」

「じゃあ私行くね」

少女は小走りでクラスに向かった

俺はノックをして返事が返ってきたので”失礼します”と言い入った

「君が桐谷亘君か」

なかなかかつこいいではないか」

校長は女性で若い人だった

「先日の依頼ご苦勞であつた

今回はマスターに転入希望されたので

任務という形で君を呼んだんだ」

マスターもお節介だな

「今お節介って思ったでしょ

お節介じゃなくて優しさとして受けとりなさいよ」

何故読まれたんだ

「何故でしょうね」

もう考えるのはやめよう

「ところで君の茶色の髪の毛は地毛？」

「そうです」

「じゃあ目は？」

「目ですか……………」

「全部マスターから聞いているよ

確認するだけ」

「そうですか

じゃあ外します」

俺はコンタクトを取って校長に見せた

「本当に赤いね

よく見たら目の奥に紋章が見えるね」

ちよっ！！校長近いです

「確認取れたしいいよ」

俺はコンタクトを付けた

「じゃあ教室に行くか

荷物はここに置いてくれたら寮まで運ぶわ

雨音先生入ってきてください」

校長が呼ぶと先生が入ってきた

「桐谷君ね

私は担任の雨音千香よろしく」

俺もよろしくと返した

「じゃあ挨拶も終わったし教室に行くわよ」

早々と校長室を後にした

先生の後を着いていくと

教室にたどり着いた

俺は転入とか初めてだからな

「あら緊張してるの

気楽にね

じゃあ先生の合図があつたら入ってきてね」

俺は頷き教室に入って行つた

俺は緊張していたので

待っている時間が長く感じた

「じゃあ入ってきて」

合図があつたので思いきつてドアを開けて入り

先生の隣に立った

「転入生かつこよくない？」

そんな声がそこから沸き上がった

「はい、静かに」

先生は手を叩いて場を静めた

「まず自己紹介ね」

俺は振られたので重い口を開けた

「桐谷亘です」

よろしく」

少し間があつた後拍手があつた

「桐谷君はわからないことが多いから

学級委員の佐原さんの隣に座ってもらおうわ」

場所的には教室の窓際の一番後ろだった

俺は頷き席に向かって座った

「また会ったわね

桐谷君」

「君はこのクラスだったんだ」

「私は佐原沙希」「サハラサキ」改めてよろしく」

俺もよろしくと返した

ホームルームが終わりクラスメイトが集まってきた

「桐谷君転入前は何してたの？」

「武器何つかうの？」

「彼女いるの？」

四方八方声を掛けられて困っている

「みんな桐谷君困っているでしょ

また後程にして」

流石学級委員

「ありがとう佐原」

お礼を述べていると一人見覚えのある男がきた

「亘久しぶりだな

あの時急にいなくなったからびっくりしたよ」

やはり大地であった

「いろいろとあつてな

連絡出来なくてすまなかった」

「いってことよ

また会えて良かったよ」

「俺もだ」

久しぶりに会えたので話が弾んだ

授業内容は今までの高校と同じような授業内容だった

変わったことは魔導学や魔法学なども増えており

体育の代わりに戦闘演習が加わっていた

魔導とは人間が元々持っている力のことで

一人一人個人差はあるが魔力があるのが発見され

授業にも取り入れられている

授業内容は使い方で

魔導の使い方は大きく4つに分けられる

魔力を収束させ攻撃する方法

バリアーを張り身を守る方法

治癒に使われる方法

武器や身体に魔力を纏わせる方法がある

どれが使えるかはセンスの問題だが

大概是2つに絞られる

2つ以上にすると魔力切れが発生するためである

俺は破壊者の魔力を持っているため

少ないと言っても常人よりは遥かに上である

魔法学はクリエイトの処置を受けた者だけである

主に呪文などを唱えて戦うらしい

この学校には上下の差があり

上はクリエイトの処置を受けた者で

下は我ら一般人である

普通に考えると一般人が余程のことをしない限り勝てないから

このようになるのは当たり前である

クリエイイト処置を受けた者は金持ちが多いんだけどな

授業内容もこんな具合に説明を受けて

明日から授業に入っていけるようだ

説明を受けていた場所は部屋と別室だったので部屋を退室すると向
こうのほうで大地と佐原が歩いて来るのが見えた

「飯食いに行こうぜ」

「そうだな行くか」

「じゃあ案内するわ」

夕食は学校の食堂で食べることが出来る

数分他愛ない話をしている間に食堂についた

「バイキングだから好きに取っていいよ」

流石私学

太っ腹である

俺は適当に選び

テーブルに座った

「じゃあ頂きますか」

3人はそろって食事を始めた

食事をしている最中横が騒がしかった

「君何組？」

「一人？」

一人の少女に3人に男子がたかっている

佐原がため息をつきながらも注意をしようとした時

「そんなウジ虫みたいなんがたかっていたら飯が不味くなる」

俺はあえて聞こえるぐらいに呟いた

案の定3人の中でトップらしき人物がこっちを振り向いた

「何か言いましたか？」

メガネを掛けた男子

以下メガネ君は不満そうに話してきた

「そのままを言っただけだ

飯が不味くなると」

「誰に口聞いているかわかっているのですか？」

少し怒りながら言った

「いい加減にしなよ

その子もかわいそうだろ」

俺は食事をしながら言った

「貴様!!」

メガネ君は顔を赤くして怒りをあらわにした

俺は座っていたので

メガネ君が掴もうとした手にあわせてバリアーを張り掴めなくさせた

なおも俺は食事を続けている

メガネ君は他の2人も呼んでバリアーを剥がそうと蹴りを入れてきた

しかし蹴りごときで俺のバリアーは破れるわけはなくメガネ君たちはイライラしている

「くそ、糞があー!!」

俺は食事を終えたため

蹴散らすために席を立って

バリアーを小さく爆発させて3人をぶっ飛ばした

テーブルに突っ込み恥ずかしい姿になっている

「覚えておけよ」

ありきたりなアニメの悪役が吐きそうなセリフを吐いて逃げていった

振り返ると大地は爆笑してて

佐原は啞然としていた

「あなたがしたことわかっているの？」

学年最強の生徒に喧嘩うったのよ」

「だって飯が不味くなっていたではないか」

「亘らしい考えだな」

大地は笑いながら言った

話を終えてテーブルを直しかえろうとした時に声を掛けられた

「さっきはありがとう」

たかられていた少女が話掛けてきた

「いやいいよ

あんな奴らいたら飯不味くなる一方だったし」

「あなた同じクラスよね

私は渡来雪「ワタライユキ」よろしくね」

「俺は桐谷亘よろしく」

俺は挨拶を返した

「よくあることなのか？」

「たまにあるかな

あの人は長いから助かったわ」

「一件落着いたから寮に向かうわ」

俺たち一向は寮に向かった

寮は門を出た近くにあり

こちらもホテルみたいな感じになっている

「じゃあまず鍵を受け取ってね」

俺は受付で鍵を受け取った

「私たちは別だからここでお別れね」

「今日はいろいろとありがとうな」

別れを告げて大地とエレベーターに乗った

エレベーターで4階まで行って部屋にたどり着いた

「俺の部屋の隣じゃん

改めてよろしくな」

今日はもう遅いということで自分の部屋に入った

部屋は普通に広く一人で使うには申し分ない

まずシャワーを浴びて着替え

荷物を整理して

そのままベッドに寝転がり就寝した

n e x t e p i s o d e

episode 5 何のために（前書き）

スローペース更新しません

episode 5 何がために

朝の日差しと目覚ましにより快適な目覚めだった

俺は洗面所で顔を洗い制服を着て

学校の支度をしていった

準備をしているとインターホンが鳴ったので出ると

大地だったので少し急ぎ

扉を開けた

「おはよう」

挨拶を交わして鍵を閉めた

「じゃあ行くか」

エレベーターに乗って下に降りて

受付に鍵を預けて寮を出た

そのまま食堂に向かった

俺たちはそれぞれ朝食を選んで座る席を探した

探していると佐原が手を振っていたのでテーブルに向かい座った

渡来も一緒だった

二人と挨拶を交わし食事を取った

食事を取っていると昨日のメガネ君が

昨日の面子を従えてやって来た

「おはよう渡来さん」

渡来に挨拶をするが

渡来は何の興味を示さなかった

「ところで君」

恐らく俺のことだろうがあえて無視をして食事をとった

「君だよ君」

桐谷亘君」

「何のようだよ」

「口を慎みたまえ」

私は君より年上なんだぞ」

俺は初めて年上だと知った

「用件は？」

「今回は大目に見てやる」

「用件は君と決闘する「いやだ」

俺はメガネ君が話をしている最中に断った

「そんなに嫌なら

私は無条件で渡来さんを彼女とする」

渡来はばつの悪そうな顔をした

「何が無条件だ

最初からそれが目的だろ？」

「では決闘するかね」

渡来のほうを見ると

頼むと合図を送ってきていた

「わかったよ」

俺はため息混じりに言った

「では放課後闘技場に集合だ

では渡来さん後ほど」

お辞儀をして去っていった

「ごめんね私のために」

「別にいいよ

あのメガネ君の彼女は嫌だろ？」

「うん」

「ならまかせろ」

俺がグッドサインをした

「ありがとう」

渡来は笑顔で返してくれた

俺たちは食事を終えて教室に向かった

俺はこの後も順調に授業を受けていった

授業の合間も放課後の決闘の話が広がり

俺にいろんな話が飛び込んでくる

例えば

「相手は名門の家系で

クリエイトの処置も受けていて

学校で1、2を争う腕だぞ」

などなかなか強いとの話がよく入ってくる

授業がすべて終わり支度をして大地たちに闘技場を案内してもらった

中に入ると観客が何人もいた

転校生と優等生の試合なので楽しみなのだろう

「よく来たね

君は動きやすい格好に着替えないでいいのかい？」

メガネ君は動きやすい格好に着替えており金色のマントをなびかせている

俺はブレザーを脱いでカバンと一緒に置いた

「俺はこれでいいよ」

「なめられたものだよ

それでいいならいいけど

では武器を召喚したまえ」

メガネ君の武器は双剣で片方ずつ色が違った

俺はいつも通り腰に武器を召喚した

「そんな安物の剣でいいのかい」

「こっちのほうが使いやすくてね」

「では君が勝つたらどうするんだい？」

「渡来に近づくな」

「私が勝つたら渡来さんは私の物だ」

「人を物扱いするな」

「何か言ったかい？」

「いや何も」

「じゃあ大地たちもギャラリーに上がっていてくれ」

「亘頑張れよ」

「頑張りなさいよ」

大地と佐原はギャラリーに上がったが

渡来は残っていた

「渡来もギャラリーに行けよ」

「私はあの椅子に座るから上がらないんだ」

あと物扱いするなって言ってくれたの嬉しかった」

「いや当たり前のことを言っただけだ」

俺は照れながら言った

「桐谷君が勝つことを信じてる」

渡来は最後に言っ て椅子に座りに行った

俺は前を見た

「では始めるとするか

早く渡来さんを手に入れたいですからね」

「そうかよ」

相手は武器を構えた

ブザーが鳴り決闘が開始された

メガネ君は片方の剣で縦に斬ってきたので

俺は横にずれてかわすが

もう片方の剣で横に斬ってきた

俺は反応して剣に手を添えて宙に舞って避けた

地面に降りてそのまま右足で腹を蹴りにいった

メガネ君の腹に蹴りが入って少し後ろに下がった

「少しはやるみたいですね

では私も力を出しますよ」

メガネ君は魔力を剣に集中させた

すると片方は炎帯びて

もう片方は電流が音をたてていた

クリエイトの能力が受け継がれているみたいだ

俺は流石に剣を両方抜いて魔力を纏わした

「やる気になりましたか

行きますよ」

相手は青色の魔力を纏って早いスピードで斬りかかってきた

俺は相手の斬撃に合わせて剣で受け流し

足払いをしたが

魔力を纏ったせいか反応速度が上がっていて

ジャンプでかわされた

着地をして回し蹴りをしてきた

俺は右手でガードするが

衝撃が強く耐えきれず吹っ飛ばされ

俺は地面に叩きつけられた

「クリエイトの力が薄いと言ってもなかなかだな」

そんなことを言っているうちにメガネ君は目の前に来ており

両剣を振りかざしてきた

俺は半分立ち上がった体制で受け止めるが立ち上がることが出来ない

「殺す気ですか？」

「殺さないとは言っていないが」

最初から殺す気だったのか

だから殺気立っていたのか

「いつまで耐えられるかな」

メガネ君は魔力を増やして剣を強化した

俺の剣が熱で溶けてきている

「魔力が強すぎる」

「もうすぐですよ渡来さん」

メガネ君が注意を反らした

「今だ!!」

俺は左手の力を抜いてメガネ君を左にながし右に抜けようとした

「甘いですね」

メガネ君は体勢を崩しながらも剣を突き刺してきて

横腹を擦れた

カッターシャツは焦げて

少し火傷を負った

俺は気にせず距離を取った

剣は溶けており使いものにならないので捨てた

「武器はなくなつたぞ

降参するかい？」

「降参する……………とでも言つて
思つたか」

俺は右手に魔力を集中させて何も無い空間につきだした

すると空間が裂けて黒い刀が出てきた

ギャラリーのほうからは疑問の聲が上がっている

「君はそんな方法で武器を隠していたのかい

そんな高度な技術は感心するね」

どうやらメガネ君は知っておりあまり驚かなかった

俺は左手を鞘に

右手を刀の持ち手に持って構えた

「抜かないのかい？」

「貴様ごときに抜く必要がない」

「状況がわかっているのかね

まあいいけど」

メガネ君は急接近してきて斬りかかってきた

「見せてやる」

俺は刀に魔力を集めて

炎帯びた剣に叩きつけにいった

剣は刀の鞘に当たると甲高い音とともに折れた

そのまま回りながらも片方の剣にも鞘を叩きつけて折った

折ったあとは隙だらけの腹に蹴りを入れた

メガネ君は吹っ飛び仰向けに倒れた

俺はメガネ君の首に鞘を突きつけた

「降参する？」

「まだだ！！」

メガネ君は右手に炎を作って近距離で放った

俺はギャラリィから見えないように左手に赤い魔力を纏って相殺し
その時の衝撃で煙が上がっている

「やった、やったよ」

煙から出てきたメガネ君は近距離で放ったから勝利を確信したのか
喜んでいる

「爪が甘いな」

俺は煙から出てきて

赤い魔力を纏ったまま鳩尾に拳を入れた

相手は声にならない声を出して気絶した

俺は立ち上がって刀を空間に閉まった

「また剣買わないとダメだな」

俺はそんなことを呟いていると

静かだった会場に歓声が上がった

「すげえ勝ちやがった」

そんな声が聞こえる

メガネ君を運び出そうといつも連れている連れがやってきた

「そいつに伝えとけ」

もう渡来に近づくなと

連れは頷きメガネ君を運び出した

俺は会場を去ろうとしたら渡来が近づいてきた

「本当にありがとう桐谷君」

「亘でいいよ」

「じゃあ亘君ありがとう」

「君はどっちでもいいか」

素直にお礼を受け取っとくよ」

ギャラリーから大地と佐原が下りてきた

「早く闘技場を出ろよ」

人がたくさん来るぞ」

俺カバンとブレザーを取って

俺たちは闘技場を後にした

n e x t e p i s o d e

episode 6 異端の力

「へえー巨君やるじゃない
相手はこの学校のトップを争うのに」

「なんて言っただって私が面倒を見たんだからね」

校長室から校長とマスターが闘技場を覗きながら話している

「うまく破壊者の力隠せているね

かなり努力したでしょう？」

「それなりにね

私のメニューのおかげね」
マスターは自信満々に言う

「それはさておき用件は何だ？」

「それはもうすぐ付与されるのだろ？」

例のクラスに」

さっきまでにこやかだった二人は

急に空気をはりつめた

「ああそうだ

今回で数えて4回目だな」

「これ以上犠牲者を増やすわけにはいかない

早く対処せねば」

「こちらでも順調にいつている

もうすぐの我慢だ」

俺たちはあれから先生に保護してもらい

無事生き延びることが出来た

放課後だったのでそのまま寮に帰って

また朝迎えて教室にいと

どうやら昨日の戦闘で俺は有名人になってしまい

朝から声のかけられっぱなしだ

正直気が滅入る

そんな事を振り返っていると先生がやってきた

「今日は特別授業なので部屋を移動してもらいます
場所は科学講義室ね」

先生がそう話すと生徒は移動を始めた

「行こうぜ巨」

俺は返事を返して行こうとしたら先生に呼び止められた

「桐谷君、君は校長室に行つてね

校長先生が呼びよ」

それを聞いて大地が

「亘何かやったのかよ」

少しにやけながら話してきた

「別に何もやっていないがな」

俺はとりあえず校長室に向かうことにした

俺は校長室に行きノックをして部屋に入った

「よくきたね桐谷君」

先生が笑顔で出迎えてくれた

「何かご用でしょうか？」

「それより昨日の戦闘見事だったよ

優等生相手に余裕そうだったよね」

「ここから見てたのですか？」

「まあ双眼鏡を使ってだけねどね」

校長先生は楽しく話している

「でご用件は？」

「力を使っても普通の人にはわからない使い方ってどうやったの？」

「秘密です」

「そんなケチ臭いこと言わずに」

「それより用件は？」

「その力の保有者って何人いるか知ってる？」

「記録上は0人」

「まあそうだよね

君みたいに隠している人もいるだろうけどね」

「何が言いたいのですか？」

「毎年選ばれて

毎年全滅しているよね」

もうあれから1年経つのか……………

1年!!

「どこかで選ばれるってことですか？」

「そう当たり！」

「どこか知っているんですか？」

「まあ一応ね」

「教えてください」

「教えてどうする？」

「止めに行きます」

これ以上被害者を出さないためにも」

「君はどうなっても？」

「構いません」

もう呪われた身ですから」

「やっぱ君をここに連れて来てよかったよ」

「何がですか？」

「何故この学校は処置を受けた者が多く

「1クラスだけ誰も処置を受けていないクラスがあるのか知っている？」

「処置を受けていないクラス……………」

「まさかこのクラスは！？」

「そのまさか破壊者になるためにだけ作られたクラスなんだよ」

「みんなはわかっているのですか？」

「それを承知で入学したんだからね」

「それでも止めに行きます」

俺はドアを開けようとしたが開かなかった

「魔力？」

「開かないようにドアに魔力を注いだんだ

開けたかったら私を倒しなさいよ」

校長先生が椅子から立って剣を召喚した

「悪いですが行きます」

俺は右手に赤い魔力を集めて拳を作りドアをおもいつきり殴った

煙が起こり見えない

煙が晴れてきてドアを確認した

「傷一つついていない！？」

「実は私も破壊者なんだ」

そつ言うと校長先生は赤い魔力を纏いだした

「魔力使ったらクリエイトに見つかりますよ」

「この部屋には魔力を遮断する加工が施してあり

さらに壁の耐久補強もしてあるから大丈夫だ

それより君の全力が見たいんだ

覚醒型は珍しいのだ」

校長先生は何型だ？

覚醒型以外は紋章がどこかにあり強化されるのだが

「私の能力探っているでしょ？

頑張って考えなさい

答えは」

「わかったやるよ」

俺はいつものセットを召喚した

「そうこなくっちゃ

行くよ」

校長先生「以下校長」は走り出し

単純に斜めに斬ってきた

俺は紙一重でかわすが

頬が少し切れ血が出てきた

「魔力の濃度が濃い？」

「ギリギリで避けたら切り刻まれるよ」

校長は横に斬ってきたので

左手で剣を抜き受け止めた

「支給された剣まだ持っているんだ

だけどその剣じゃ

私の専用武器には勝てないよ」

確かによく見たら剣に亀裂が入っている

昨日の応急手当でしたから余計にもろい

俺は距離を取ってベルトごと外した

「専用武器でも出してくれるの？」

「専用武器？」

俺のは拾ったやつですよ」

「専用武器じゃないの？」

だからあれだけしかパワーが出ないのか」

校長は納得したように頷いた

「まあまた専用武器は作るとして

どうする？

あの刀じゃ勝ち目無いけど」

「やってやりますよ」

俺は何もない空間から刀を出した

「拾ったやつじゃ同調しないからね

じゃあ行くよ」

校長は一瞬で距離を詰めて蹴りを入れてきた

俺は構えたまま横にずれて

鞘で殴りにいった

「おっと」

校長は剣で受け止めた

「またひび入るよ」

「大丈夫です」

俺は魔力を鞘に集めた

「まだ魔力薄いわ

それじゃ押しがたりないよ」

剣で弾かれて回し蹴りが飛んできたがバリアーを破られ蹴り飛ばさ

れた

壁に衝突して咳込んだ

「覚醒型も覚醒出来なくちゃこんなものかね

降参する？」

俺は首を横に振った

「まだやるの？」

傷が増えるだけよ」

俺は立ち上がり構えた

「行くぞー!!」

掛け声とともに力を解放した

校長先生との戦闘が終わり

急いで科学講義室に向かった

講義室からは大地や佐原や渡来がちょうど出てきた

「大丈夫か？」

三人は不思議そうに見てきた

「別に先生が頭に手を置いて暖かい感じがしたただけだったけど」

「えっ!？」

「ところで桐谷君はどうしたの？」

「まあ家のことでだ」

「そうなんだ

講義室には入らないの？」

「うん」

「何で？」

「校長先生に入るなと言われたからだ」

「何だ」

校長先生が言ったのなら仕方ないね」

「じゃあ教室に戻るか」

俺たちは教室に戻った

「たくあの力は何よ」

校長室には一閃のひびが壁に入っている

「覚醒型って興味深いね

いきなりだったからびつくりしたけれど

あれだけ力があればいけるかも」

校長先生は呟きながら部屋の掃除をしていた

n e x t e p i s o d e

episode 7 真実の力

教室に戻り机に座って俺は一人考えていた

まず破壊者に選ばれる条件は

破壊者の根源たる赤い玉のようなものに接触すること

校長先生はこの学校で生み出すと言っていたが

これでは全く生み出せない

一体学校は何をしている

頭に暖かい感触がしたと言うのがどうも引っ掛かる

「巨君？」

俺が気がついた時には渡来が心配そうな顔で見えていた

「いやちよつと考えることをしてただけだ

何か用か？」

「ただ亘君が怖い顔をしていたから気になって」

「そんな怖い顔していたのか

それはすまなかった」

「何もなかったらいいの」

話をしていたら先生が来たので渡来は自分の席に戻った

「みなさんお疲れ様でした

今回は特別授業と言うことで破壊者について説明します

破壊者はクリエイトに唯一対抗できる者であるが

毎回全滅に終わっている

破壊者は1st、2nd、3rdと分けられ君たちは4thとなります

また能力にも違いがあり中でも2ndの力が強大だったと言われています

4thの君たちの能力は物質を魔力で構築し武器に変えることが出来る能力です

だから歴代の中でも一番の魔力を有することになります」

先生が話している中一人の男子生徒が頭を抱えて苦しみ始めた

「もう時間ですか

みなさん頑張つて乗り越えてくださいよ」

俺は確認のために席を立ち辺りを見渡すが全員が頭を抱えて唸っている

「君の時とは違つてしょ

2ndの桐谷君」

「まさか今回はクリエイトの処置の応用を!？」

「そのまさか

魔力を増幅させるには魔力を流し込むのが一番手っ取り早いだよ」

「この学校の先生には破壊者が混じっているのか？」

「3rdの者たちがね

クリエイトと契約して生き延びているのよ

私は一般人だけどね」

「脳を紋章代わりにしたのか？」

「質問多いね

予想が合ってるよ」

一人また一人と唸っている者が減った

「みなさんよく耐えられましたね

これで君たちは4世代目4tの破壊者よ

早速だけど何かイメージして武器を作ってみて」

生徒は思い思いに武器を作っていた

「巨作らないのか？」

大地が話しかけてきた

「俺は一般人だから出来ないよ」

そんな大地は自分で作成した武器ガントレットを見せてきた

「いいだろ」

大地は昔空手を習っていたから恐らく格闘を選んだのだろう

「いいんじゃないのか」

「そうだろ」

大地は嬉しそうに頬を掻いている

大地と話していると渡来と佐原がやってきた

「大地、武器ガントレット何だ

亘は？」

「俺は一般人だから無いよ」

「何で一般人なのにこのクラスにいるの？」

「多分俺の戦闘能力が評価されてこのクラスにいるのだと思う

それより二人の武器は？」

「じゃあ私から

私の武器は盾と長剣よ」

そう言うと佐原は両手を出して盾と長剣を出した

両方光をイメージしたのかとても輝いている

「私の武器は

私は両手銃よ」

渡来は両手に銃を召喚した

俺の持つ銃とは違い最新の技術が使われているのが見た目から感じられた

「結局亘の武器って何なのよ？」

「俺か俺はベルトに付けているセットだ」

俺は腰にいつものセットを召喚した

「それじゃなくて前に出した刀じゃないの？」

「あれは拾いものだからよくわからないんだ

ただ刀の鞘が使えるから使っているだけだ」

「一般人だから専用武器無いのか

しかしそれでよく勝てたね

あの優等生に」

「たまたまだよ」

「早く席に着きなさい」

先生は手を叩いて席に座らした

「言つの忘れてたけど

仮に1stと2ndが生き残っているのが確認されたら

抹殺してくださいね」

俺はそれを聞いて唾を飲み込んだ

「まあめつたに無いことだけどね」

先生が俺にチラチラ視線を送ってくるので

無視をして外を眺めた

また授業もこれが最後だったのでこれから訓練が増えるとの報告が
されて授業が終了した

「1st2ndを見つけたら抹殺か」

俺はポツリと呟いた

俺からしたら欲しくて手に入れた力じゃ無いので

今からしたら無いほうがいいと思える

この力のお陰で運命を狂わされたからな

俺は立ち上がり鞆を持って教室を去ろうとしたら大地が話しかけてきた

「みんなでパーティーするんだが亘も参加するだろ？」

「いや俺は用事があるから先に帰るわ」

俺はどつちかというと早く教室が出たかったから返事できずと教室を出た

「何だよあいつ」

俺には理解出来ない

何故呪われた異端の力を欲しがるのか

そんなに力が欲しいのか？

俺は力を手に入れてから良いと思ったことは無い

しかしあえて言うなら人助け出来ることぐらいである

元々破壊するための力なので使いすぎると世界を壊しかねない

こんなことを考えていると学園の外に出ていた

寮に帰ってからもやることも無いので

近くの森でも剣の素振りをすることにした

「久しぶりだな」

そう呟き森に入り素振りを開始した

素振りを開始してから二時間が経った

今日はこれくらいだろ

俺はふと何かを思い刀を出すことにした

俺は刀を出し眺めた

この刀は専用武器ではないのか？

試しに抜こうとするがやはり抜けない

不思議なのが拾った物なのに何故俺の魔力に反応するのだろうか？

専用武器が反応するならまだしも

拾い物だからな

「そんなに不思議なのかその刀が」

俺は声に反応して刀を構えた

「そんなに身構えないでよ」

影から一人の男が出てきた

「誰だ貴様は？」

「私はその刀を錬成した者でございます」

「何だと!？」

「正確には私の師匠がメインでサポートをさせてもらったのですがね

何故君の力に反応するのか教えて欲しいですか？」

俺は頷いた

「まず何故その力に反応するのか

それは師匠が破壊者だったからです

1stの

師匠は自分の魔力を込めて最強の刀になるように鍛え上げ

結果常人では抜けないようになりました

師匠以上の魔力を持たないと」

「その師匠はこの刀を何故手放したのか？」

「それは師匠がこの刀に飲まれてしまったからです

師匠は暴走する前に自分で命を絶ち私にこう言い残しました

「この刀を人目のつかない場所に封印をしてくれ」と

私はあの祠を作り刀を封印しました

しかし一年前に祠が破壊されたのを感じ

あなたが刀を持ち去って行くのを見かけました」

「この刀は人を飲み込む妖刀なのですか？」

「今は封印がされていて飲み込まれません」

半分しか力を発揮されていません

しかし解除も方法がわかれば簡単に解除できてしまう

いわばこの刀は破壊者のために作られた刀なのです

あなたは解除のやり方を知りたいですか？」

俺は、俺は…………

この力の真実を知りたい

破壊するための力ではなく

誰かを助ける力になるのではないのかと

「お願いします」

俺は深々とお辞儀した

「わかりました」

俺は説明を受けて理解をすることが出来た

「まずこの刀を抜くことが出来るだけでも凄いことですよ

あと妖刀への変換の乱用はしないでください

体が持たなくなります

使いどころを考えて使ってください」

「了解した

ところでこの刀は俺の専用武器ということでもいいのか?」

「そうですね

刀とあなたの魔力が同調してきているので専用武器ってことでもいいです」

改めて自分の専用武器となったこの刀をまじまじと見た

「この刀の名前は?」

「紅葉です

妖刀持の名前は村雨です」

名前があるとやはりしっくりくる

「では私はこの辺で」

「あなたの名前は?」

「私はただの弟子ですよ」

ではまた会いましょう」

弟子は丁寧にお辞儀をして森の中へと消えていった

「一体誰なんだ？」

n e x t e p i s o d e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3902v/>

破壊者

2011年11月15日05時00分発行